新連載

鳥インフルエンザ――新しい展開への考察①

加藤宏光

LPAIへの道のり

本年六月二十六日に茨城県水海道市で発見されたLPAIは、『抗体陽性であれば殺処分』という行政の方針で起きた恐怖が、その後、大規模養鶏における発生時に『オープン鶏舎では殺処分、ウインドウレス鶏舎であればウイルスが取れない条件下で三カ月の観察処分』という、いわばダブルスタンダードの方針を元に、大きな混乱をもたらしながら現在に至っています。

昨年におけるわが国での七十九年ぶりのHPAI発生時点では、それまでの風聞による症状と現実の展開の乖離に意外感を持ち、また、当初の半径三〇キロという広範囲な移動禁止処理と、解除までの長い期間(三週間)が持つ経済障害の故に恐怖感を募らせたものの、京都での発現とカラスの汚染が次々と伝播発生を示唆しながらも、幸い大きな波及を招くことなく沈静化しました。

著者は一昨年十月から本誌に三回(一一頁)に渡って寄稿し、HPAIを前提としたHPAI発生のリスクについて小説仕立てでシミュレーションを試みました。この想定は不幸なことに、現実の発生時でほとんど再現されたと言ってもよいほど的中してしまいました。しかし、その折にLPAIについては、このシリーズ(全四回)の最終回でわずか半ページ触れたのみでした。

この根拠は、抗体陽性群では必ずしも殺処分という厳しい処置が決定されていなかったことや、一過性の産卵低下や低レベルの減耗率上昇程度の症状が与えるサイエンスを前提としたダメージの軽さ(殺処分という人為的な被害は実感できなかった)でした。鶏の直接的なダメージが軽い、という先入観が災いしたわけです。しかし、現実の茨城における経済的な惨状を耳にすると、その被害や心理の現状はHPAIに対比して決して軽んじられるものではありません。今回のLPAIは、その被害がもっぱら茨城に限定されているため、その他の地域ではおよそ観念的で、わが身に置き換えて考えるにしても実感がないような気がします。

七月中旬から八月半ばにかけて、隣接する福島県の生産者は口々に「明日はわが身ですから…」と言っていました。しかし、八月下旬から十月一杯のおよそ二カ月間、抗体陽性農場は検出されるものの、ウイルスが分離される例がないこと、行政や家きん疾病小委員会から口を揃えて「すでにウイルスの活動はない。今のフィールドは焼け跡を見ている状態で危険は極めて少ない」というアナウンスが続くにつれて、徐々に危機感が薄れてきました。

十月下旬にある生産者の事務所でAIについてのディスカッションをした折に、若いオーナーが同じ言葉を口にしました。

「明日はわが身ですから…」

彼は七月の初めに巡回した折にもまったく同じ言葉で心配を露わにしていました。

著者の返答は次のものでした。

「顔つきが違う！　七月に同じ言葉を口にしたときは、今のように笑顔を浮かべてなかったよ。今の顔は、『もう過ぎた』と語っているネ。でも、まだ過ぎてないからね！　まだまだ緊張を緩めてはだめだ」

現にそのとき、十一月一日に採材された群ではウイルスは活発に増殖していたのです。目に見えないウイルスが虎視眈々と狙っていたわけですから、極めて危機的な状況にあっ

たことになります。AIの持つ種々の問題を再度検証する必要性を実感するストーリーです。

本シリーズでは、LPAIの持つ深刻な問題を改めて実感するために、かの源氏鶏太氏に再度登場してもらうことにしました。今回初めて彼に接する読者の方々に、三年前に彼が経験した恐ろしい経験をかいつまんで紹介し、今回のLPAIへと話を進めることにします。

源氏鶏太の恐ろしい経験

今から考えると三年前になります。当時四十二歳の鶏太は、親から譲り受けた六万五〇〇〇羽の農場を、優れた経営感覚で四カ所、一〇万羽ずつ計四〇万羽の中規模農場に仕上げました。アメリカのタマゴ農場がそうであるように、彼は消費の量に見合う生産をモットーとして、求められる量を増産するために、懸命に流通開拓を行っていました。

そうしたある日、いつも見かける呼吸器病のような症状を呈する一羽の鶏を見つけた彼は、若いスタッフに気をつけて観察することを指示し、とあるスーパーへの営業活動に出かけます。

彼の留守中に、彼が見つけた病鶏は死亡し、隣から隣へと病気は伝播していました。心配した若いスタッフが、家畜保健所のS獣医師に連絡し、この伝染病がHPAIであることが明らかになったのです。

農場が四カ所に分散していたため、移動禁止にはかかったものの、現実に淘汰処分となった農場は一カ所に限定され、物理的な影響は比較的少なく済みました。しかし、瞬く間に広がった情報による風評被害は激しく、毎日一五トンを上回るタマゴを受け取ってくれるスーパーもなく途方に暮れる毎日が続きました。前回のシリーズで源氏鶏太氏の物語はここで終わり、その後の経過は読者諸兄の想像に任せました。

この物語を発表した当時、わが国のAI対策はまだ確立されていませんでした。補償金額も仮定であり、殺処分や移動制限がどういった形で施行されるかはまったく分からない状況下で、諸外国の事情を踏まえて想像しながら執筆したものです。

しかし、その次の年に山口県に端を発したHPAIにおいて、家きん疾病小委員会の設定した防疫方針は、かなり現実的なものと評価できます(半径三〇キロ以内の移動禁止範囲とその期間の長さはかなり過大で、経済被害は大きいものでしたが…)。なぜなら、その他の国では、【HPAI発生に際して、三～五キロの防疫エリアを設け、その領域内の鶏はすべて殺処分に処する】という厳しい処置を下していました。

この点では、わが国では発生当該農場の淘汰のみで、防疫エリアについては定期的な観察処分で拡散を監視し、蔓延を確認した場合には殺処分するという処置は、各国に先駆けて現実的な処理を実践したものとして評価できます。

また、被害に対する補償は淘汰に対して羽当たり六〇〇円、生産補償は保険を含めて一一〇〇円で合計一七〇〇円となりました(今回の現実では、淘汰補償金額は日齢による残存価格を加重平均して算出されますし、生産補償は生産を再開する条件で出され、かつ保険金は積み上げ金額が八億円時点で大発生したために原資が枯渇してこれ以上の補償が不能となっている)。

防疫エリアや殺処分の条件が明らかになった現在を条件に、鶏太の農場についての詳細を確認してみましょう。

鶏太の経営体実容

①本場：四万羽のウインドウレス鶏舎三棟、計一二万羽で時間当たり三万個の洗卵選別機を設置したオフラインGPがある。鶏太の自宅が併設。妻ヒナ子は本場で経理を担当。

②第一分場：本場から直線八キロ東方に位置して、四万羽のウインドウレス鶏舎二棟、計八万羽。ファームパッカーを設置し、原料卵で本場GPへ搬送。

③第二分場：本場から直線一〇キロ北方に位置し、四万羽のウインドウレス鶏舎三棟、計一二万羽。ファームパッカーを設置し、原料卵で本場へ搬送。

④第三分場：第二分場からさらに北へ直線二キロの距離にあり、四万羽のウインドウレス鶏舎二棟、計八万羽。原料卵で第二分場へ移動後、まとめて本場GPへ搬送。

⑤育成農場は計画中であるが、現在は大ヒナ導入。

⑥GPはチーフを含めて九人。

⑦生産要員数は各農場二名で、他に

鶏糞処理要員が三人。鶏糞処理は全農場を順次巡回して実施。

⑧第一分場に隣接して鶏糞処理工場（コンポスト）があり、日量三〇トンの鶏糞を処理できる。処理しきれないものは、各農場の補助鶏糞乾燥設備で乾燥処理後、水分調整に応用してコンポスト処理。

⑨発酵鶏糞は、独自ブランドでスーパーや日曜大工センターで販売。

⑩ブランドを確立するため、規格外率は一七％（日量二トン）。

⑪販売条件は中堅スーパーに定価販売（粗利益五五円／キロ）が三五％、残りは相場で販売。

⑫輸送費は農場持ちであるため、定価販売の利益から三〇円分は引いて換算する必要あり。

⑬十年前に近代化資金を利用して本場から拡張を始め、事件の前年に拡張を終えたところである。羽当たり借入金は二四〇〇円（二十五年返済、金利は〇・九％据え置き）。総額は九億六〇〇〇万円に及ぶが、二年の据え置きで返済を始めているため、一億七〇〇〇万円を返済し、残債は七億九〇〇〇万円である。

⑭本場の土地は自分のもので（分場は借地）、延べ四町歩（一二万坪）で、郊外に比較的近いことと、みなし宅地であるため、坪単価は七億二〇〇〇万円に相当する。

これらの条件は、不動産担保能力がやや大きい以外には取り立てて言うほどの特徴的なものでなく、中規模で努力を惜しまない若手生産者ではよく見られる典型的な一例といえるものでしょう。

この諸条件で、鶏太のその後の物語を続けることにします。

再起への道

HPAIの被害を受けた本場では、ウイルスが全鶏舎に伝播したために直ちに殺処分の判断が下されたが、殺処分した鶏の処分方法に対する結論が出ないため、実際の処分作業に移るにはさらに一週以上を要した。まず周辺住民が、埋却処分の情報に過剰な反応を示して強い反対の意向を示したことから、賛意を得るための交渉が行われたのである。

最終的には、翌年に掘り出して焼却処分する条件で合意し、ようやく処分が開始される運びになった（実際に起きた京都の事例では、埋却された鶏体を掘り出して焼却処分するための調査が始まっています）。

作業の手配はすべて行政が担当し、当初は県の担当が総動員で実施したが、何分慣れない作業であり、遅々として進まない。

「源氏さんですか？」

ある日、ヒナ子の取った受話器に温和な印象の声が響いた。

「はい」

「鶏太社長はいらっしゃいますか？」

「おりますが、どちらさまで…？」

ヒナ子は、それまでの緊張感に苛まれる電話応対とは違った温かい声音に少しほっとしながら、尋ねた。

「これは失礼しました。YYスーパーのチーフバイヤー、伊藤です」

YYスーパーは鶏太が事件発生前に懸命な売り込みをかけていた大手スーパーである。AI発生以来、すべての流通が停止されていたヒナ子には、伊藤の目的が分からない。

「代わりました。源氏です」

鶏太にも、伊藤という人物に心当たりがない。

「はじめまして、YYの伊藤と申します。チーフバイヤーをしています。先日、当社においでいただきました折には、不在にしておりました。このたびは、本当に大変なことで…」

「ありがとう存じます」

相手の目的が分からない鶏太には返事のしようがない。黙っていると、伊藤は言葉を続けた。

「現在は、取引を再開することはできませんが、今回わが国で出た鳥インフルエンザは、ある意味で衝撃的でした。残念ながら、現状では市場はパニック状態で、相場も暴落状態ですし、発生エリアの周辺三〇キロ圏内の生産品についての流通はかなり難しいものとなっています」

鶏太にもその辺りは想像がつく。といっても、最初に発生した農場として挙げる言葉がない。黙って聞く以外にないのである。これまでも、（AIを発生させた農場）として、非難の電話は数え切れない。ほとんどが怒鳴られるのである。

しかし、伊藤のトーンは温和である。伊藤は言葉を続けた。

「源氏さんは、極めて初期に保健所に届けられたそうですね。大変勇気のある行動と、感心しております。なかなかできるものではありません」

言葉を聞いてホッとするものの、今置かれている、切羽詰った状態と

伊藤の話が繋がらない。ただ、耳を澄まして次の言葉を待つ。
「流通の役目は、消費者の不安を煽ることではないと考えています」
さらに、伊藤は言葉を続ける。
「私は精肉を二十五年担当しています。わが国に強い鳥インフルエンザがどのような形で入るものか、見当もつきませんでした」
「ホントにそうですネ。私も、こんな形でやられるとは思いもしませんでした」
「今回の発生に際して、御社のとられた態度は立派だったと思います。今までの畜産業界では、とかく馴れ合いがあるように感じておりましたが、世界はどんどん変化しています。コンプライアンスという言葉をご存知ですか？」
伊藤の言葉に鶏太は答えた。
「あまり耳にしたことがないのですが…」
伊藤は続ける。
「遵法生産とでも言えばいいでしょうか。つまり、これまで、とかくありがちだった『結果オーライの形で違法行為を見逃すことは、悪である』というポリシーを守りながら生産する、ということですネ」
これまで、誠心誠意ものづくりに打ち込んできた鶏太にとっては、伊藤の言葉は意外な気持ちを呼び起こす。
「私は、これまで精一杯正直に生産してきましたよ」
「そうでしょうね。だからこそ、鳥インフルエンザという深刻な事態に出くわしても、これだけ初期に届けることができたのでしょう！」
その上で、伊藤は続けた。
「私どもの販売姿勢は、これまでもそうでしたが、これからはさらにコンプライアンスを大事に守ろう、ということになっております。トップがこのたび、『当然のコンプライアンスが今日曖昧になっている。これをわが社の全体イメージとして取り上げ直そう』というポリシーを打ち出しました。御社のこのたびの不幸な出来事に対する毅然たる姿勢は、ある意味、今の社会に訴える何かが含まれるものです。鳥インフルエンザに対する対応が混乱している現在、御社の製品を流通に乗せることには少し時間が必要になるでしょうが、わがＹＹグループはこういう事態だからこそ、業界に率先して御社のバックアップをしようと決定されております」
鶏太は、伊藤の息もつかない説明にこれまで尾頭に重くのしかかっていた、ＡＩ騒動からの復帰への道筋が与えられたことを感じ、思わず胸が熱くなって答えた。
「ありがとう存じます。本当に！　ありがと…」
「いやいや、『お気落としのないように、このことをすぐご連絡を』とのトップの意思で、お取り込み中とは存じましたが、ご連絡差し上げました。今後の方針を立てる折には、是非ともご連絡ください」
こうした一連の会話の後に伊藤は電話を切った。
「どうなさいました？」
おずおず問いかけるヒナ子の言葉に、鶏太

は我に返って答えた。
「棄てる神あれば、拾う神ありって、言うよな。ホントにそういうことがあるんだよ！」
　ヒナ子には何のことか分からない。怪訝な面持ちをする彼女に鶏太は続けた。
「今のは、ＹＹ、俺がＡＩ騒動の直前に一所懸命に営業してたＹＹの統括バイヤーからの電話だよ。この騒動が落ち着いたら、流通については全面的にバックアップしてもらえる、ってさ」
「ホント？　どうして？」
　ヒナ子の疑問は無理もない。今の今、まさにＡＩで大騒ぎをしている最中に、新しい展望が開けるなどとは信じろといっても信じられるものではない。訝しさの去らないヒナ子に、鶏太は自分に言い聞かせるように続けた。
「今回の発生を、ほんの初期で保健所に届けたろう。ＹＹさんは、この正直な姿勢を今後のＹＹポリシーと一致する大事な精神だ、ということで、トップダウンでバックアップを決めてくれたそうだ。助かるよ。ホントに助かるよ!!」
「そうなんですか。よかった。よかった～。でもそうなると、今回の一番の功労者は亮太君ですね。彼が一番心配してＳ先生に届けたのですから」
「アア、そうだな！　騒動に振り回されて、彼のこと忘れてた。どうしてる？」
　あの日に心配そうに鶏太の後ろを追いかけて農場を回った一番若い担当、亮太の少年めいた顔を思い出しながら尋ねた。
「あの子が世話をしていたトリが毎日毎日殺されるのですから、まいっているみたい。かわいそうに…」
「そうだよな。俺だってまいってるのに、まだ子供だからな、あの子は！　ちょっと見てくる」
　鶏太はヒナ子に言い残して、現場へ足を向けた。分厚く撒かれた石灰がまるで雪化粧をしているような道路を、白い防御繋ぎ服を着た作業員が黙々と作業と続けている。亮太は、突っ立ったままで、その作業を見つめていた。
「大丈夫か？」
　鶏太の声に、亮太は振り向いた。
「あっ社長。どうなるんですか？　これから。俺、ここに居ていいんですか？」
「大丈夫だよ。お前のおかげで、俺は救われた。お前がすぐにＳ先生に連絡してくれたろう。あんなに早く連絡するのは誠意があるからだ、っていうことでＹＹの会長が直接バックアップしてくれるように指示してくれたんだ」
　鶏太は、亮太の行いが大きな評価を受けたことに触れながら、さっきの経過をかいつまんで話した。亮太は初めて笑顔を浮かべて頷いた。

苦難の道

　ＹＹスーパーの好意あるバックアップの申し出があったとはいえ、当面の鶏太への至難の道が回避されるわけではなかった。
　発病した鶏群の処理は行政がすべて責任を持って行い、農場内への埋却作業などの諸作業について、彼の手を煩わすことはなかった。
（実際に山口や京都に発生したＨＰＡＩにおいては、行政サイドではすべての処理に関して周辺住民の同意を取り付けることに、多大の労力とコストをかけざるを得なかったと聞いています。自衛殺、というオプションがとられざるを得ないようなケースでは、一連の処理を民間で実施する場合に果たして順調に同意を得られるものかどうかに不安が残ります。こういった場合には、行政の積極的なサポートは必須のものとなるでしょう）
　しかし、二十一日間にも及ぶ移動禁止で、鶏太の生産物はすべてストックされることになった。彼の頭を悩ますもっと大きな問題は、何らの発生もない農場で、（まさにそこが検疫領域にあった）という事実のみで、移動禁止処分に処せられた生産農場が一三件六〇万羽余りあった、ということである。
（ＨＰＡＩの発生）という情報は、あっという間に全国津々浦々に伝わり、このエリアのみでなく県産のタマゴであるだけで、流通から締め出されるケースが、テレビ放送で毎日のように報道される。こういったニュースに接するたびに鶏太は暗い気持ちにさせられるのであった。
『俺がやったわけじゃないのに。俺は被害者なんだけど…』
　そうは思いながらも、苦しむ同業者の思いは、痛いほどわかる。それゆえに、鶏太の心は痛むばかりであった。
　マスコミは興味本位で報道し、業

界外の注目を集めることに奔走している。隣接するブロイラー農場で同様の症状が報告され、ＨＰＡＩとの確定がされたのは鶏太の農場で発生が確認報道されてから十日余り過ぎた頃であった。この伝染については、心無い報道カメラマンが朝早く鶏太の了解もなく鶏舎で鶏の死ぬ様子を撮影した後に、隣接ブロイラー農場へ入り込んだ事実が伝えられ、警察の監視が強まるといった余波を巻き起こしながら、それでも四週間の長期に渡る殺処分が終了するに至って、鶏太の精神状態も少し落ち着いてきた。

これからのことを考える気持ちの余裕が生じ始めたのである。少年スタッフが極めて初期に家畜保健衛生所に報告したため、世論は概して鶏太に同情的で、さらにマスコミの不用意な行動で二次被害者が生まれたことが鶏太の加害者的な印象を薄め、本来の被害者としての立場を浮き彫りにした。

融資

鶏太の本場と隣接するブロイラー農場の淘汰が終了するのに一カ月余り。騒然とするこの期間を過ぎた頃、鶏太はメインバンクの応接室で融資担当である鈴木支店長と話し合っていた。融資のテーマは、今回の事件で派生している需要への繋ぎ資金と全体の建て直しに必要となる大きな資金の借り入れである。

繋ぎ資金は、移動制限で発生する売上停止に代表される。鶏太の場合の生産原価は原料卵換算でキロ当たり一四一円である。一日の生産量は一七トン余り、一日の必要経費は二四〇万円ほどになる。一日の売り上げはこれ以上でなければ経営の維持はできないことになる。また、大ヒナの手形サイトは四・五カ月、一羽七八〇円であるから、二ロット分四万羽、三〇〇〇万円余りの支払いが徐々に迫ることになる。これらの条件を前提として、この先四カ月の繋ぎ資金はどうなるのかは、いつ生産品を流通させることができるのかにかかっている。

現在までの出荷停止で七五〇〇万円がショートしている。発病までの売掛金が二週間分で約三三〇〇万円、これまでに必要とした資金は、内部留保と売掛金の入金で何とか間に合わせた。淘汰に対する補償を得るには、行政の動向を見なければならない。あと一カ月はかかるだろう。その間の資金は必要であろう。さらに必要となる繋ぎ資金はおおよそ一億円ほどにもなろうか。

事業の再開に要する資金はさらに複雑である。考えなければならないことは――

①いつ、流通は復活するのか。

②本場で生産を復活するための大ヒナは順調に供給されるだろうか。

③元通りの販路が復帰できるのか。

④現在の卵価で経営維持が可能か。

こういった条件は、今後の流れを見なければ分からないことも多い。経営者はこういった場合、自分の直感を大事にする。

『大丈夫、やっていける！』

鶏太は自分の勘を信じ

ることにした。それしか選ぶ道はないのだ。

『わがＹＹグループはこういう事態だからこそ、業界に率先して御社のバックアップをしようと決定されております』

先日、伊藤の電話での言葉は鶏太に大きな励ましを与えている。

「この度は、本当に大変でしたね。もう落ち着きましたか？」

笑みを浮かべながら、鈴木は問いかける。

「おかげさまで。今回の事件では行政の方々にも早期の届出についての評価をいただき、それをまたＹＹグループの会長に取り上げていただくことができました。生産再開の際に特別のご配慮を下さるお約束を頂戴できましたので、今後の大きな支えになっています」

鶏太は、ＹＹの伊藤からの話を紹介しながら、今後の経営が順調に進むであろうことを一心に訴えた。

「それにしても、これまでの資金だって大変だったでしょう？」

「確かに大きな繋ぎが必要でしたが、幸い皆様がいろいろ間接的にご協力下さいましたので、売掛金の入金と、内部留保で間に合わせてきました。でも、現在、稼動できない状況下で当面の資金を工面しないと給料も払えなくなりますので…」

「再開はいつ頃になるのでしょうか？」

「今ある三〇万羽分は、何の問題もありません。ＧＰさえ稼動できれば、従前の七五％はすぐにでも復帰できます。本場への大ヒナ導入は、相手のあることですから、今調整中ですが、とりあえずおとり鶏を入れて、鳥インフルエンザウイルスがすでに存在しない証明をしてくれることになっています」

こうしたやり取りの後、鶏太は支店長の否定的でない感触を得て、銀行を後にした。具体的には、さらに事業計画書を持って再度申請することになる。

『意外にうまく行きそうだな。もう少し難しい展開かと心配したのだけれど…』

鶏太は、銀行の姿勢が融資に大きな障害を感じなかったが、これが行政の【家畜伝染病予防法に積極的に協力する農場を潰すことは極力避ける】という基本姿勢に銀行が反応しているためとは気がつかない（現実に山口や京都で二次感染を受けたブロイラー農場の再生に際しては、行政が様々な形でバックアップしている、との話を家きん疾病小委員会の内輪話として聞き及んでいます）。

例の二次感染ブロイラー農場以外の発生はなく、その後のサーベランスでもＡＩ陽性は引っかからない。初めてのＨＰＡＩについての大方の予想を良い方に裏切って、ＡＩコントロールは成功裏に収束へと向かった。ＨＰＡＩ発生以来四カ月、おとり鶏の検査も済み、大ヒナを購入した後の生産は順調と言える。ＹＹグループは、『コンプライアンスをポリシーとする』と連絡したチーフバイヤーの言葉通りに、真先に取引を回復してくれた。

「大変だったけれど、何とか切り抜けたね！」

流れが順調になる見通しがついたある日の夕飯時、久しぶりにゆっくりと晩酌を楽しみながら、鶏太はヒナ子に語りかけた。ヒナ子も生きた心地のしなかった四カ月前を思い起こしながら、深々と頷いたものである。その時、彼らは再び地獄の試練を味わうことを未だ知らない。

（㈱ピーピーキューシー研究所代表取締役／農学博士・獣医師）